

E 22 家族組織化強度に関する研究——短大生の家族状況分析を通して——  
就実短大 ○足立裕子

目的 家族組織化とは家族統合度により明確な概念であり、家族成員の結合度（精神的、経済的）とする。本研究は家族の現状がいかなる状況下にあるかを把握するために次の一つの試みである。家族がどのような質と昔の問題をかかえているかを基礎要因とし、更に家族統合を規定する家族統合意識要因を加えて家族組織化の指標とし、調査した。結果は上記の要因数別に家族を類型化し、組織化程度を測定した。（家族問題の質とは、被調査者の問題意識の深刻さの程度とし、量とは家族問題数とした。）

方法 ①被調査者 私立短大生 186名 ②調査方法 質問紙法 ③調査時期 57年6月  
調査内容 基礎要因4項目の有無と程度（上、中、下）①経済②身体③対人関係④個人内面、及び統合意識4項目（役割構造の合意、統一目標、統合感、欲求満足感）の有無をそれぞれ別々に得点化し（0-4）、得点別に5タイプに分類し、更にこれを家族組織化強度大、中、小に3分類し、家族類型別、夫婦勢力構造別、統合意識別、家族関係別（夫婦、父子、母子、他）、母親の就労有無別、職業形態別 等に分析を行なった。

結果 家族類型別では、三世帯家族の方が核家族をやや上をわす組織化強度であり、夫婦勢力構造別では、平等型夫婦が最も組織化強度大で、夫優位型、妻優位型の順で組織化強度は大であり、統合意識では、統一目標有無別では差があまりないが、統合感の大きい家族、役割満足が大きい家族、欲求満足が大きい家族ほど家族組織化強度は大であり、家族関係別では、父母との関係が調和的であるほど家族組織化強度は大であり、母親の就労有無別では、無就労の母親をもつ家族の方が組織化強度大であり、